

〔野菜・作物優良品種の選定と育成〕
需要が高いニガウリの有望品種

小寺孝治・田邊範子・澁澤英城・沼尻勝人

(園芸部)

【要 約】都内におけるニガウリの生産性把握と適品種の検討を行った。その結果、ニガウリは品種によって収量性や果実形状が著しく異なり、収量や外観的特性から都内では‘F₁改良節成ゴーヤ2号, にがにがくん’の導入が有望である。

【目 的】

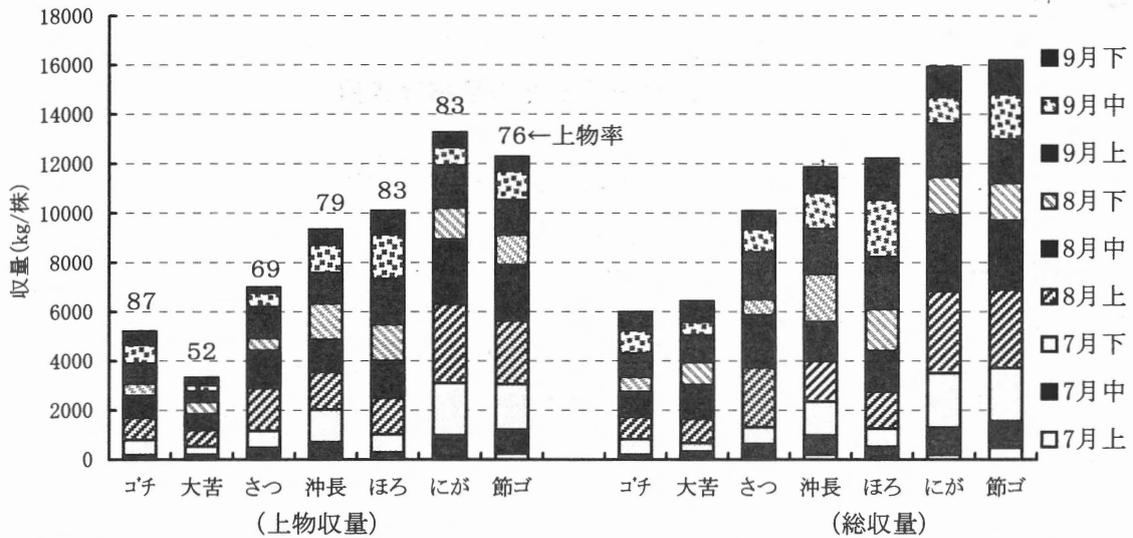
食の多様化に伴い、最近ではニガウリの需要が高まっている。しかし、都内でのニガウリの生産性については知見が少なく、集約的な栽培法や有望品種も明確でない。そこで、比較的密植条件下において適品種の検討を行う。

【方 法】

供試品種は‘ゴーヤチャン’ほか6品種を用いた。播種は2003年4月4日に72穴セルトレに行った。4月23日に床幅70cm(黒マルチ, 通路110cm), 株間1mで定植した。定植から5月14日まで、スライムのべたがけとユーラックのトンネル被覆を行った。その後、片側アーチパイプで半弧に支柱を立て、キュウリネット用いて仕立てた。また、密植栽培を行っているため、パイプアーチの頭上から下垂する枝は適宜切除した。施肥は1a当たり成分量でN, P₂O₅, K₂Oをそれぞれ1.9, 2.3, 1.9 kgを施用し、追肥は行わなかった。

【成果の概要】

- 1) 総収量と上物収量の品種別順位はほぼ同様であった(図1)。目方の上物収量の順位は、‘にがにがくん>F₁改良節成ゴーヤ2号>ほろにがくん>沖縄長れいし>さつま大長苦瓜>ゴーヤチャン>大長苦瓜’の順であり、その差は上物収量で約3.8倍、総収量で約2.5倍の差であった。
- 2) 果数は‘F₁改良節成ゴーヤ2号=にがにがくん>沖縄長れいし=さつま大長苦瓜>ほろにがくん>大長苦瓜>ゴーヤチャン’の順であり、その差は約2.5倍であった(図3)。
- 3) 1果重は‘ほろにがくん’が最も大きく、‘大長苦瓜’が最も小さかった。逆に果長は‘大長苦瓜’が最も長く、‘ほろにがくん’が最も短かった。他の品種は果重180g前後、果径は4~5cm, 果長は25~30cm前後の範囲であった(図2)。
- 4) ニガウリ全品種の果重と果長や果径との関係は正の相関関係がみられるが、果長と果径には負の相関関係がみられた。しかし、個々の品種でみると、果重と果長や果径との関係は正の相関関係がみられるが、果長と果径には相関関係がみられなかった(表1)。つまり、個々の品種の果長や果径は品種固有の大きさ持っていることが推察される。
- 5) 食味の点で、ニガウリは独特の苦みを備えているが、そのなかで‘ほろにがくん’だけは苦みが少ない品種であった。
- 6) 以上の結果、ニガウリは品種によって収量や果実形状に大差がみられる。その収量性や果実形状から都内では‘F₁改良節成ゴーヤ2号, にがにがくん’の導入が有望である。



品種の列記順:ゴージャチャン, 大長苦瓜, 沖縄長れいし, ほろにがくん, にがにがくん, さつま大長苦瓜, F₁改良節成ゴージャ2 (丸種) (日東農) (中原) (トキタ) (トキタ) (中原) (中原)

図1 ニガウリ7品種の旬別収量

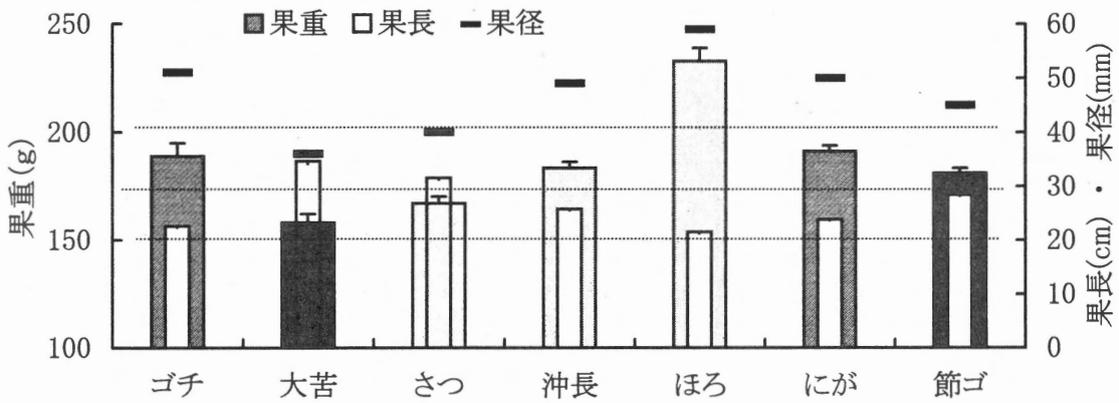


図2 ニガウリの上物果実の大きさ 垂直バーは標準誤差を示す(n=150<)

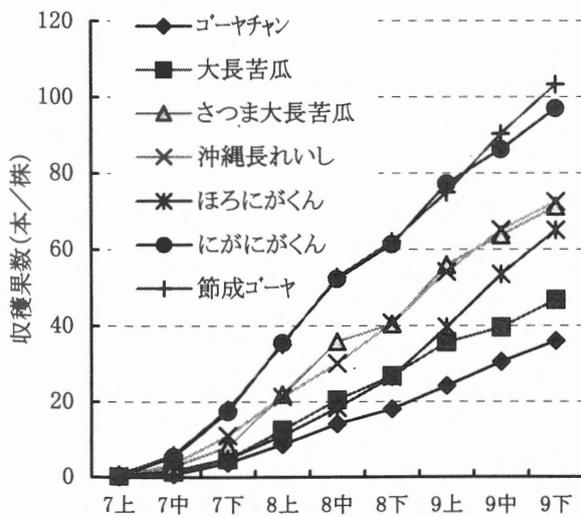


図3 ニガウリ7品種の収穫果数

表1 ニガウリの果重と果実サイズにおける品種ごとの相関係数と全品種の偏相関係数

品種	重×長	重×径	長×径
ゴージャチャン	0.71	0.72	0.39
大長苦瓜	0.73	0.53	0.10
沖縄長れいし	0.64	0.64	0.21
ほろにがくん	0.69	0.76	0.42
にがにがくん	0.68	0.64	0.22
さつま大長	0.60	0.58	0.14
節成ゴージャ	0.65	0.55	0.13
偏相関(全品種)	0.65	0.80	-0.67

各品種(n=150<),全品種(n=1960)